

仕事人秘録

川崎氏は28歳のときに交通事故に見舞われた。その経験がその後の人生を大きく変えた。

幼い日の思い出や私に大きな影響を与えた両親の話をする前に、私の体のことを話しておきたい。私が培ってきた強い闘争心とも無縁ではないからだ。

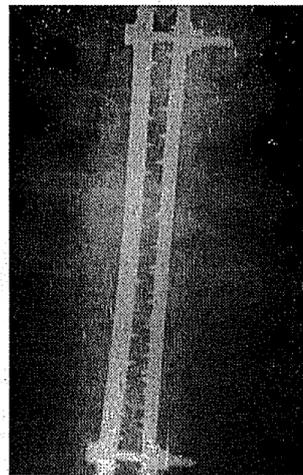
私の体のレントゲン写真にはステンレス製の板がポルトナットで背骨に固定されているのが見える。事故の直後、救命のため急いで手術をした痕跡だ。私の体の奥に残る異物を見ると、ずいぶん荒っぽい手術をされたものだと思う。

私は淡麗なモノを作り、機能美を実現するデザイナー

未来の予感を形に ②

工業デザイナー

川崎 和男氏



川崎氏の背骨にはステンレス製の板がポルトで固定されている(レントゲン撮影)

リハビリで知った人間の闇

の電車から地下鉄に乗り換えて、当時は銀座の阪急ビルにあった東芝の意匠部、今で言うデザインセンターに通勤していた。近所の日劇までよく歩いて行った。車いすの生活に慣れたため、リハビリが始まり、私は「社会の縮図」を味わう

うえ、人間の汚い部分を見て、人間的な部分も知ることができた。残念なことだが、こうした迫害や嫉妬というものは、どの世界にもある。その後、私がデザインの世界で活躍の場を広げるに従い、「この業界も同じなのか」と気付くのに時間はあまりかからなかった。

1だ。ところが、その体の内部は何とかかっこうが悪いことか。この体内の異物に最初は怒りを感じた。身の回りのモノは何でもデザイン

突され大破したというもの。大けがを負い、もう二度と歩けないと医師に宣告された。

ことになった。比較的早く、車いすで階段などの段差を越えることができるようになり、トレーナーからは拍手が起きた。そこまではよい。その後、私に嫉妬(し)や社会の中で筋が通らないと思えることに対し向かっていった。だが、私の闘争心の源泉は身体だけではない。幼いころから自分なりに闘い方を身に付けてきた過去がある。

ンでできるのに、自分の体の中は「かっこう悪い」まま、なすすべもない。「美」のみを信じる私にとって許し難いことだった。

脊椎(せきつい)損傷だった。私がリハビリのために入った病院は通勤で使った。東急東横線から見えていた病室の窓から自分が乗っていた電車を眺める

立場になると、何とも言えない気持ちに襲われた。あ

事故の内容は川崎氏が乗ったタクシーが車に追

ない気持ちに襲われた。あ